生駒経済論叢　第6巻第2号　2008年10月

TOEIC® テスト初級者のための リスニング・セクション パート2攻略法再考
——近畿大学経済学部のTOEIC® テストへの取り組みとともに——

井　上　　治

概要　本論では，TOEIC® テストの問題を追加分析することを通して，TOEIC 初級者のためのリスニング・パート2攻略法を再考する。前回考察した「wh 疑問文の出だしの疑問詞だけでも聴き取れれば正解できる問題がある」,「wh 疑問文に対して Yes/No で答えている選択肢は100%不正解である」,「質問文の『内容語』と音声面で関連のある語を含む選択肢は90%が『ひっかけ選択肢』である」という攻略法が，依然として初級者にとって効果的なものであるかどうかを検証する。最後に，近畿大学経済学部の TOEIC® テストへのこれまでの取り組みを報告し，今後の課題を述べる。

キーワード　TOEIC® テスト，リスニング・セクション パート2，初級者，攻略法，近畿大学経済学部

原稿受理日　2008年9月9日

Abstract　The purpose of this paper is to reconsider the three strategies for TOEIC® test beginners to deal with the Listening Section PartⅡ through additional analysis of the questions asked by ETS.　We consider whether the following strategies, previously discussed, are still effective for beginners in answering the questions: "If only we can catch the interrogatives of wh-questions, we can answer many questions in this part of the test," "All responses which begin with 'Yes' or 'No' to wh-questions are distractors," and "Responses which include words phonetically-related to content words in questions have a 90 percent probability of being 'tricky' distractors." The efforts in the test made by the School of Economics of Kinki University and the future issues for them are also reported.

Key words　TOEIC®, Listening Section PartⅡ, Beginners, Strategies, The School of Economics of Kinki University

1. はじめに

筆者は以前，リニューアルされたTOEIC® テスト（以下，新テスト）とリニューアル以前のTOEIC® テスト（以下，旧テスト）のリスニング・セクションのパート2について，TOEIC® テスト（以下，TOEIC）を開発・制作しているEducational Testing Service（以下，ETS）の問題を，旧テスト2冊と新テスト1冊の公式問題集を分析することを通して考察した。旧テストにおいては，1979年12月にスタートして約30年間でわずか2冊の公式問題集しか出版されず，しかもその2冊はもともと1冊の英語版を時期を置いて分冊のような形で出版したものに過ぎなかった。そのいっぽうで，2006年5月より公開テスト，2007年よりIPテスト（団体特別受験制度）でも導入された新テストに関しては，2005年12月に1冊目の公式問題集が，筆者が論文提出直後の2007年2月に2冊目が，さらに，今年の4月にはその3冊目が出版された。そこで今回は，新テストのリスニング・セクションのパート2の問題を追加分析し，旧テストの問題傾向と比較しながら，TOEIC初級者がスコア400点を獲得し，500点に近づけていくためのリスニング・パート2攻略法が新テストにおいても有効であるかどうかを検証してみたい。

TOEICを日本で運営・実施している財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会のTOEIC運営委員会が，2007年度のデータ，すなわちIPテストにおいても新テストが導入された年度のデータを発表しているので，前回の論文の際に引用した2005年発表の旧テストのデータを併記しながら，リスニング・パート2を取り上げて考察する理由をあらためてまとめておく。

2008年発表のそのデータによると，IPテストにおける大学1年生の平均スコアは406点［387点（2005年発表のデータ，以下同様）］（リスニング232点［222点］，リーディング174点［165点］），大学4年生の平均スコアは499点［492点］（リスニング280点［277点］，リーディング219点［215点］），公開テストにおける大学生の平均スコアは553点［545点］（リスニング301点［300点］，リーディング252点［245点］）となっている（DATA & ANALYSIS 2007，8－9，［DATA & ANALYSIS 2004，8］）。ETSが作成したProficiency Scale（TOEICスコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表）によると，220点から470点までは「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」Dレベルとされる（TOEIC® STYLE BOOK，17）ので，大学1年生のほとんどは，TOEIC中級者に移行できるレベルの初級者ということになる。ところが，データによると，教育機関（大学生がその約80%

［70%］を占める）が受験したIPテストにおいて，約半数の46.54%［48.66%］の受験者が395点以下（D＆A 2007, 4,［D＆A 2004, 4］）なので，「TOEIC中級者に移行できるレベルの初級者」になることは，実際には容易なことではないのである。いっぽう，公開テストでは395点以下の受験者は全体の15.14%［15.9%］（D＆A 2007, 2,［D＆A 2004, 2］）であることから，公開テストのTOEIC初級者は，TOEICの問題形式や出題パターンなどを十分知ったうえで受験しているいわば「熟練したTOEIC初級者」であることがわかる。これは裏を返せば，大学生でも十分な準備をせずに受験すれば，406点に遠く届かないどころか，「コミュニケーションができるまでに至っていない」Eレベルとされる220点以下にもなり得ることを意味している。

TOEIC運営委員会は，TOEICのそれぞれのパートでどれぐらい正解すれば「TOEIC中級者に移行できるレベルの初級者」のスコアを獲得できるかという数字をいまだに公表していない。したがって，少し古いデータではあるが，日本でのTOEIC普及に努めた三枝幸夫氏が論文のなかでTOEIC運営委員会から提供された資料を基にして出しているパートごとの正答率を，実際の受験者のデータを基にしているという点で唯一信頼できるものとして参考にする。それによると，リスニング・パート2の正答率は400点では51%，500点では59%となっている（Saegusa, 138）。もちろん，新テストでは，初級者がスコアをかせぎやすいパート1の問題数が20問から10問に減り，かせぎづらいパート4が20問から30問に増えたので，パート2の正答率は5%上乗せした56%，64%ぐらいで考える必要があるだろう。

リスニングのパート2を分析対象として取り上げる理由であるが，まず，大学生の平均スコアにおいてリスニングのスコアがリーディングよりも50〜60点高いことである。TOEICのリスニングは難しそうと考えられがちだが，大学生に限らず，初級者にとってはむしろリスニングに力を入れるほうが，スコアを伸ばしやすい。これは，公開テストの全体の平均スコアでもリスニング315点［312点］，リーディング264点［254点］と，リスニングのスコアがリーディングのスコアを大きく上回る結果となっていることから明らかである（D＆A 2007, 2,［D＆A 2004, 2］）。次に，まとまった長い会話や文章を聴くパート3・4よりも，単文を聴くパート1・2のほうが初級者にとってやりやすいのは当然であり，400点で61%，500点で73%の正答率（Saegusa, 138）があったパート1の問題数が半分になったことで，初級者がスコアを伸ばすという観点からすると，パート2がより重要になっているからである。さらに，新テストでパート3と4に関して設問のマイナーチェンジがなされたいっぽうで，パート2に関しては問題数はもちろん，問題形式にも

まったく変更がないので，新旧のテスト問題を同じ方法で分析できるからである。

それでは，ETS が作成した問題を分析しながら[1]，TOEIC 初級者がスコア400点を獲得し，500点に近づけていくためのリスニング・パート2攻略法の有効性を再考する。

2.「wh 疑問文に注目する」を再検証する

パート2は，質問文に対する3つの応答から最も適切なものを選ぶという問題形式だが，今回分析した308問（新テスト189問，旧テスト119問）の質問文のなかの，155問（新87問，旧68問）が wh 疑問文である。これは，全体の50.3%（旧57.1%⇒新46.0%）に当たり，以下 yes-no 疑問文が18.5%（16.0%⇒20.1%），平叙・命令文が8.4%（1.7%⇒12.7%），付加疑問文8.1%（9.2%⇒7.4%），選択疑問文7.8%（8.4%⇒7.4%），yes-no 疑問文の形を借りた依頼・勧誘・提案の文6.8%（7.6%⇒6.3%）となっている。目を引くのは，新テストで wh 疑問文が大きく減り，平叙・命令文がその分大きく増えている点である。この平叙・命令文の問題は質問文に対して正答となりうる応答の範囲が広いので，難易度がほかの質問文よりも高くなる。したがって，中級以上の受験者は平叙・命令文の質問文のパターンに十分に慣れておく必要がある。

さて，出題数が減っているとはいうものの，新テストにおいてもほぼ半数の問題は wh 疑問文なので，wh 疑問文の質問文に対応していくことがパート2でスコアを伸ばす大きなポイントであることに変わりはないと思われる。そこで，前回提示した TOEIC 初級者のためのパート2攻略法の一点目である，

---

(1)　今回分析した308問に関して述べる際の記号であるが，「旧 1―22」は，『TOEIC® 公式ガイド＆問題集　日本語版』の「ミニ・テスト」(27，スクリプト201～02）の22番の問題であることを示す。以下，「旧2」は同書の「パート別の受験方法」(57)，「旧3」は同書の「サンプル・テスト」(121～23)，「旧4」は同書の「練習テスト」(161，スクリプト236～39)，「旧5」は『TOEIC® 公式ガイド＆問題集 Vol. 2　日本語版』の「ミニ・テスト」(27，スクリプト182)，「旧6」は同書の「Listening 練習問題」(53，スクリプト54～59)，「旧7」は同書の「練習テスト」(149，スクリプト200～05)，「旧8」は「TOEIC® STYLE BOOK」の「TOEIC® テストサンプル問題」(16）であることを示す。さらに、「新1」は『TOEIC® テスト新公式問題集』の「サンプル問題」(13)，「新2」は同書の「練習テスト（1）」(30，スクリプトは『解答・解説編』9～14)，「新3」は同書の「練習テスト（2）」(82，スクリプトは『解答・解説編』91～96)，「新4」は「TOEIC® STYLE BOOK」の「新 TOEIC® テストサンプル問題」(20)，「新5」は『TOEIC® テスト新公式問題集 Vol. 2』の「サンプル問題」(14)，「新6」は同書の「練習テスト（1）」(32，スクリプトは『解答・解説編』9～14)，「新7」は同書の「練習テスト（2）」(78，スクリプトは『解答・解説編』95～100)，「新8」は『TOEIC® テスト新公式問題集 Vol. 3』の「サンプル問題」(17)，「新9」は同書の「練習テスト（1）」(40，スクリプトは『解答・解説編』9～14)，「新10」は同書の「練習テスト（2）」(82，スクリプトは『解答・解説編』95～100）であることを示す。

wh 疑問文の出だしの疑問詞だけでも聴き取れれば正解できる問題がある

をまずは検証する。出だしの疑問詞だけ聴き取れれば正解できる問題は，新テストでは33問（旧テスト35問）あり，それは wh 疑問文の質問文全体の37.9%（旧51.5%）に当たる。具体例を挙げると，

旧1—22 質問文	*When* does Mr. Gustavson predict the construction of the building will be finished？（強調は筆者。以下同様）
選択肢A	Out of steel and concrete.
選択肢B	Twenty million dollar.
選択肢C	In about a month.（正答を網かけで表す。以下同様）
新3—17	*When* did they fill the assistant manager position？
A	At the new branch office.
B	Because he retired.
C	Last Monday.
新10—32	*How often* does the general manager visit the branch office？
A	Two or three times a month.
B	About fifteen kilometers from here.
C	Mostly to check on their progress.

といった問題であり，質問文の構造が複雑であったり，質問文の意味が把握しにくかったり，質問文に聞き慣れない語句があったとしても，出だしの疑問詞さえ聴き取れれば正解できる。

いっぽう，出だしの疑問詞だけが聴けても正解できない問題の代表例は，

旧3—9	*Why* don't you let me leave the tip？
A	Because I need you here.
B	It's not too far.
C	I've already taken care of it.
新2—24	*When* will the concert start？
A	The symphony is nearly an hour long.
B	As soon as everyone is seated.

C	It was first performed ten years ago.
新9—31	*What* do you like to do in your spare time ?
A	It depends on the weather.
B	I suggested it.
C	At about half past four.

であり，旧3—9のように，単純な結び付けが通用しない問題（Why don't you～？が提案の表現なので，why—because という結び付けでは正解できない），新2—24や新9—31のように，正答の可能性のある選択肢が2つ以上ある問題（新2—24では When will～？まで聴いて初めて過去の時を表すCの可能性が消え，新9—31では when や where にくらべて正答の可能性の範囲が広い what が疑問詞なので，Cの可能性は消せてもAとBが残る）である。新テストにおいては，このような問題が旧テストとくらべて13.6ポイント上昇して wh 疑問文の質問文全体の62.1%を占めているので，新テストでは質問文全体を聴きとる能力がより求められるようになっていることが明らかにわかる。

そうはいうものの，出だしの疑問詞だけ聴き取れれば正解できる問題がすべての問題に占める割合は新テストでも17.4%（旧テスト29.4%）あり，この数字は，前項でみた目標の正答率400点—51%の3割3分を，500点—59%の3割弱を占めている。したがって、初級者にとって，「wh 疑問文の出だしの疑問詞だけでも聴き取れれば正解できる問題がある」という攻略法は，旧テストにおいてほどではないものの，新テストにおいても有益なものだといえる。

さて，新テストにおいては，出だしの疑問詞だけが聴けても正解できない問題が wh 疑問文の質問文全体の約6割を占めていることを確認したが，問題を分析した結果はっきりとみられた次の攻略法を組み合わせれば，そのうちのいくつかの問題を正答に変えることができる。それは，

wh 疑問文に対して Yes/No で答えている選択肢は100%不正解である

というものである。旧テストでは，不正解の選択肢両方を Yes/No で答えている問題が，次の具体例を含めて5問みられるが，このパターンは新テストではみられなくなっている。

旧4—42	*How* can I get more letterhead and envelopes ?
A	Yes, the mail is picked up three times a day.
B	Contacts Ms. McKay in the stockroom.
C	No, he isn't the head of the department.

それに代わって，新テストでは，2つの攻略法を組み合わせるパターンが以下の2問（旧0問）ある。

新3—26	*Who*'s working on revising the report ?
A	Not before the holidays for sure.
B	I don't know if it's been assigned.
C	Yes, he's a good reporter.
新9—11	*Where* has Mr. Garcia gone ?
A	At three o'clock.
B	To see Mr. Jones.
C	No, not yet.

新3—26では，疑問詞 who に対して人を表す語を含む選択肢は2つあるが，Cは攻略法に当てはまるため，Bを選ぶことができる。そして，新9—11では，疑問詞 where に対して場所を表す具体的な語を含む選択肢がないが，時間を表す選択肢Aを外したあと，Cを消去してBを選ぶことができる。

さらに，新テストでは，次のパターンが以下の具体例を含めて8問（旧4問）みられる（本論で取り上げているほかの攻略法で正答を得られるものと重なっているものは除く）。

新2—27	*Where* should I send the revised version of the contract ?
A	He's probably from the United States.
B	I think my home address would be best.
C	Yes, the last page has five mistakes.
新3—21	*What* took you so to get here ?
A	No, it's much shorter.
B	I was stuck in traffic.
C	About three hours.

新6—23	*What* was Mr. Yuan's idea for increasing our sales ?
A	No, it's not on sale.
B	He wants to advertise more widely.
C	That's a good price.

新2—27は，疑問詞 where に対して，それぞれの選択肢に場所を表す語が含まれているので，新3—21と新6—23は，正答の可能性の範囲が広い what が疑問詞なので，それぞれ疑問詞のみを聴き取っても正解にたどり着くのは難しいが，上の攻略法を用いれば Yes/No で答えている選択肢は確実に除外されるので，難問が50%の確率で正解できる2択の問題に変わることになる。このパターンは理論上2問に付き1問正解できることになるので，新テストでは正答が4問増えることになる。

さらに，この攻略法は選択疑問文の問題にも当てはまるので，ここで選択疑問文の具体例を扱っておく。

新2—35	Should I schedule the meeting for earlier in the day or later ?
A	Any time in the morning is OK with me.
B	Yes, I've met with the day-shift workers.
C	No, I wasn't late for the meeting.
新10—28	Would you prefer to take a short lunch or stay past five tonight ?
A	Twelve o'clock.
B	No, he's very tall.
C	I'd rather leave early.

それぞれ質問文が長いので難しい問題にみえるが，攻略法を用いれば，新2—35は選択肢Aを選ぶことができ，新10—28は2択の問題に変わる。新テストでは，前者のパターンが1問（旧2問），後者のパターンが4問（旧2問）ある。後者のパターンは理論上2問に付き1問正解できることになるので，選択疑問文の問題で合計3問（旧3問）正答が増えることになる。

以上みてきた2つ目の攻略法に関連した3種類のパターンを，「出だしの疑問詞だけ聴き取れれば正解できる問題」に加えると，新テストでは33問＋2問＋4問＋3問＝42問となり，すべての問題に占める割合は4.8ポイント増の22.2%となる。この数値は，目標の正

答率400点—51%の4割強を，500点—59%の4割弱を占めるものになる。

さて，「wh 疑問文の出だしの疑問詞だけでも聴き取れれば正解できる問題がある」に「wh 疑問文（と選択疑問文）に対して Yes/No で答えている選択肢は100%不正解である」を組み合わせると，22.2%まで伸ばせることはわかったが，目標の51%，59%にはかなり遠い。しかも，旧テストではこの時点で35問＋5問＋2問＋3問＝45問となり，すべての問題に占める割合は8.4ポイント増の37.8%となっていた。この数値の差は，新テストにおいては，これら2つの攻略法では旧テストほどの大きな効果を得られなくなっていることを明らかに示している。それでは，もうひとつの攻略法を組み合わせることによって，新テストにおいて51%，59%に近づくことができるかどうかを次項で検証する。

3. 「『ひっかけ選択肢』に注目する」を再検証する

前回は新テストを63問と旧テストを119問の合計546の選択肢を分析したが，今回は新テスト126問の378の選択肢を追加分析したので，新テストに関しては合計189問の567の選択肢を分析したことになる。そのなかで，質問文で用いられた「内容語」（その語自体が具体的な意味内容を持つ語で，動詞，名詞，形容詞，副詞などがその中心である）と音声面で関連のある語が含まれる選択肢は192個（旧テスト107個）あった。しかし，そのうち正解の選択肢はわずか20個（旧6個）しかなかった。つまり，このパターンの選択肢のうち，実に89.6%（旧94.4%）が不正解の選択肢（以下，本論では「ひっかけ選択肢」とよぶ）なのである。これこそが，TOEIC 初級者がパート2を戦う最大の武器となる，

質問文の「内容語」と音声面で関連のある語を含む選択肢は90%が「ひっかけ選択肢」である

という攻略法なのである。具体例を挙げると，

旧4—44	You're the new assistant to Mr. Lin, aren't you？（下線は筆者。以下同様）
A	No, I don't need assistance.
B	No, I work for Ms. Wong.
C	Yes, I knew about that.
旧7—39	Don't leave town without letting me know.

A	I'll be sure to give you a call.
B	I know that city very well.
C	He lives outside of town.
新2—23	I found the documents that were missing from the folder.
A	I will hold a space for Ms. Smith.
B	Yes, the folders are missing.
C	Please bring them with you to the meeting.
新3—29	Has Dr. Robinson's office called you with the estimate for your dental work ?
A	Our estimated arrival is 4 P.M.
B	Yes, I'm working hard this week.
C	No, they're out on vacation.
新7—28	How does this week's schedule look ?
A	I'm pretty busy.
B	It will only take a week.
C	I don't know what he looks like ?
新8—13	This software is difficult to use, isn't it ?
A	Yes, it's very complicated.
B	Yes, I often wear it.
C	No, but she used to.

であり，旧4—44では派生語・同音異義語，旧7—39では2種類の同一語・発音の似た語(live—leave)，新2—23でも発音の似た語（folder—hold a，missing—Ms. Smith)・同一語，新3—29では2種類の品詞ちがいの同一語，新7—28では2種類の同一語，新8—13では同音異義語・発音の似た語（use—used）がそれぞれ「ひっかけ選択肢」として用いられている。wh 疑問文の質問文より難易度の高い付加疑問文の質問文の旧4—44と新8—13，同様に wh 疑問文の質問文より難易度が高く，しかも長めの yes-no 疑問文の質問文の新3—29，wh 疑問文のなかでも when や where にくらべて正答の可能性の範囲が広い how が疑問詞の新7— 28，同様に質問文に対して正答となりうる応答の範囲が広い平叙・命令文の旧7—39と新2—23のこれらの設問はすべて，初級者にとっては一見難易度が高く感じられるであろうが，この攻略法を知っていれば正答にたどり着くことができるのである。

さて，この項の最初でみたように，「内容語」と音声面の関連語が含まれる選択肢に占

める「ひっかけ選択肢」の割合は新テストでは89.6%なので，旧テストの94.4%とくらべると数値が下がっているようにみえる。しかし，全体の不正解の選択肢（新テスト378個，旧テスト238個）に対する「ひっかけ選択肢」の割合をみると，旧テストでの42.4%が新テストでは45.5%となり，数値が逆転する。これは，前項でみた「wh 疑問文の出だしの疑問詞だけでも聴き取れれば正解できる問題」が新テストにおいて13.6ポイントも減少しているのに対して，「ひっかけ選択肢」は不正解の選択肢として積極的に使用されていることを明らかに示している。したがって，初級者に限らず，「質問文の『内容語』と音声面で関連のある語を含む選択肢は90%が『ひっかけ選択肢』である」という攻略法を知っておくことは，大いに役立つのである。

それでは，この攻略法で実際どれぐらいの問題に正解することができるのだろうか。まず，正答以外の2つの選択肢に「ひっかけ選択肢」が含まれている上の6例のようなパターンは，新テストでは実に189問中43問（旧119問中23問）あり，この22.8%という数値は，旧テスト19.3%を3.5ポイント上回る。前項までの数値にこの数値を加えてみると，実際には，新テストの43問中5問（旧23問中6問）は，前項でみた「wh 疑問文の出だしの疑問詞だけで正解できる問題」や「wh 疑問文に対して Yes/No で答えている選択肢を除外するだけで正解できる問題」と重なっているので，純粋な「『ひっかけ選択肢』を除外するだけで正解できる問題」は38問（旧17問）である。したがって，新テストでは，前項までの42問に38問が加わり80問（旧45問＋17問＝62問）になる。これが全問題に占める割合は，前項までの22.2%から20.1ポイント増の42.3%（旧37.8%⇒52.1%）まで急上昇し，この時点で，目標の正答率400点―51%の8割，500点―59%の7割まで届く数値になる。

さらに，新テストでは189問中21問（旧119問中49問）が，不正解の1つの選択肢だけに「ひっかけ選択肢」が含まれている問題，すなわち，正解できる可能性が50%ある問題である。いくつか例を挙げると，

旧5―22	Is production higher this month ?
A	It's about the same as before.
B	No, they hired one last month.
C	It's on sale next week.
旧6―48	Didn't anyone train the new employee to use the copier ?
A	John takes the bus to work.
B	The copier's in the staff room.
C	Mike showed him how everything works.

新3—14	The new marketing director is arriving from Singapore tomorrow.
A	Yes, it's south of the airport.
B	The markets in Singapore are doing well.
C	I'm looking forward to meeting him.
新6—26	I can't remember which of your sisters is coming into town next week?
A	Next week is fine.
B	It's Lina, the oldest one.
C	Don't forget to go.

であり，このように質問文が wh 疑問文でない問題や質問文が長い問題は，初級者の多くは難しく感じてしまうので，耳に残っている質問文の音声面の関連語が含まれている選択肢を選んでしまう可能性が高い。しかし，「ひっかけ選択肢」に関する攻略法を知っていれば，その選択肢を除外して難問を2択の問題に変えることができる。しかも，「ひっかけ選択肢」をすばやく機械的に除外することができれば，残り2つの選択肢から冷静に正答を導くことができる可能性が高まる。

さて，ここでも実際には，新テストの56問中11問（旧49問中19問）は，ほかの2つの攻略法で正解できる問題と重なっているので，このような問題を除くと，純粋な「『ひっかけ選択肢』を除外するだけで正解できる可能性が50%ある問題」は，新テストでは45問（旧30問）となる。理論上2問に付き1問正解できることになるので，新テストでは，80問に45問の半分の22問が加わり102問（旧62問＋15問＝77問）になる。

さらに新テストでは以下のような問題がある。

新2—22	*How* did your lecture go yesterday ?
A	He was out yesterday.
B	It couldn't have been better.
C	Yes, I'm ready.
新9—36	*Who* will be presenting our idea to the board of directors ?
A	The sale ends on Friday.
B	The present is for Miguel.
C	I believe it will be Jennifer.

新2—22では疑問詞 how の正答となりうる応答の範囲が広いため，新9—36では質問文

の長さと疑問詞 who に対して人を含む選択肢が2つあるため，初級者にとっては出だしの疑問詞のみで正答にたどり着ける可能性は低い。しかし，前項でみた攻略法と「ひっかけ選択肢」に関する攻略法を組み合わせれば，前者では選択肢Bが自然に残り，後者では人を含む2つの選択肢からCが自然に残ってくる。新テストでは，前者のような「wh 疑問文に対して Yes/No で答えている選択肢」と組み合わせることで正解できる問題が6問（旧0問），後者のような「wh 疑問文の出だしの疑問詞」と組み合わせることで正解できる問題が3問（旧0問）あるので，理論上正解できる問題は9問プラスされ，合計111問（旧は変わらず77問）になる。

理論上正解可能な問題が全問題に占める最終的なパーセンテージを以上の数字からはじき出すと，新テストでは58.7%（旧64.7%）となる。この数値は，目標の正答率400点—51%はクリアし，500点—59%にもぎりぎり届く数値である。ただし，「はじめに」の項で指摘した，問題形式のリニューアルにともなう正答率の5%上乗せの数値である400点—56%，500点—64%には，旧テストの最終数値の64.7%ならばクリアできているのだが，新テストの数値では500点—64%には残念ながら届かない。それでも，本論で述べた攻略法を実践すれば，TOEIC 初級者でもリスニング・パート2において400点を獲得できる正答率はクリアすることが，さらに，500点を獲得できる正答率に近づけることが，理論上十分に可能なことが明らかになった。

さらにいえば，新テストの最終数値は旧テストを6ポイント下回っているが，前項の時点で旧テストとのあいだでついていた15.6ポイントの差が9.6ポイントも縮まっているということは，「質問文の『内容語』と音声面で関連のある語を含む選択肢は90%が『ひっかけ選択肢』である」というこの項でみてきた攻略法が，新テストにおいて大変有効であることを明らかに示しているといえる。したがって，新テストにおいてこの攻略法を知っておくことは，TOEIC 初級者に限らず大いに役立つであろうことを強調することで，この項を終えることにする。

4. 実践的攻略法を考える

本論では，リスニング・パート2における，「wh 疑問文の出だしの疑問詞だけでも聴き取れれば正解できる問題がある」，「wh 疑問文に対して Yes/No で答えている選択肢は100%不正解である」，「質問文の『内容語』と音声面で関連のある語を含む選択肢は90%が『ひっかけ選択肢』である」という3つの攻略法を再検討してきた。そして，最初の2

つに関しては，有効ではあるが，旧テストほどの大きな効果を得られなくなっていることがわかった。いっぽう，「ひっかけ選択肢」を除外する攻略法は，新テストでも大いに役立つことが考証された。

もちろん，考証してきた数値はあくまでも理論上の数値であり，このパートにおいては，質問文全体をしっかりと聴いたうえで正答を選ぶことができなければならないこと，また，実際にそうしなければ600点，700点に達することは不可能であることは明らかである。しかし，そのいっぽうで，TOEIC は特殊なテストなので，本論で検証したものを含めたさまざまな攻略法を身に付けていくこともまた重要なことであり，TOEIC 初級者にとってはそれがなおさらのことであることもはっきりとしているのである。

現在，後でも述べる近畿大学経済学部2年生の「英語演習」の「TOEIC 重視クラス」において，リスニング・パート2対策として，問題演習とは別に，質問文全体のディクテイションをおこなっている。すると，学年上位のクラスの学生（TOEIC スコア　クラス平均505点）でも，質問文全体をしっかりと聴き取れている学生は少ないことに気付かされる。しかし，明るい側面をみれば，それでも500点前後を取れているわけだから，質問文全体をしっかりと聴き取る練習を積み重ねていけば，パート3の対話文に対応していくリスニング力もついていくので，リスニング・パートにおけるかなりの高スコアが望めることになる。したがって，質問文全体を正確に聴き取る練習を一年を通じておこなっていきたい。

以上のことを考え合わせると，リスニング・パート2に関しては，質問文全体をしっかりと聴き取る練習をしながら，正答をうまく導くことができなかった場合のヘルプとしていくつかの攻略法を身に付けておくというのが，500点がゴールではなく，600点，700点を目指すための本当の意味での攻略法になるのであろう。

5.　経済学部の TOEIC への取り組み

近畿大学経済学部は，2005年度より学部所属の英語教員チームをつくり，学部独自の英語教育をスタートさせたが，その核となるひとつが TOEIC を重視し，そのスコアアップを目指すというものである。具体的には，1年次と2年次の12月に TOEIC IP テストを受験することを必須とし，学年共通で受験前の TOEIC 対策授業をおこなっている。さらには、毎年6月に任意受験の TOEIC IP テストの実施、高得点者に対する単位認定（2007年度入学生からは、例えば530～595点取得者には3年次履修英語科目の2単位を認定）も

おこなっている。

対策授業は，11月初旬から12月中旬までの5～6週間を「TOEIC 週間」とし，1年生は週2回の科目「英語演習」，2年生は週1回の科目「英語演習」（2008年度からは週2回の「英語演習」のうちの1回の「TOEIC 重視クラス」）の授業のなかで，リスニング対策とリーディング対策を90分の授業時間の60分以上を使っておこなうというものである。特にほとんどの学生が初めての受験となる1年生に対しては，試験の概要説明から問題演習まで，ていねいな受験指導をしている。

そして，これまでの学生の受験結果は以下のようになっている。

入学年度	1年次の平均点（リスニング平均点/リーディング平均点）/受験人数	2年次の平均点（リスニング平均点/リーディング平均点）/受験人数
2005	356.8（202.6/154.2）/694名	345.3（197.4/147.9）/582名
2006	368.4（212.2/156.2）/677名	332.6（194.8/137.8）/495名
2007	354.8（205.8/149.0）/755名	

1年次と2年次を比較するとそれぞれスコアが下がっているが，これには特別な事情があった。2006年度入学生までは，500点以上を取れば2年生の「英語演習」を含む単位の認定があったため，500点をクリアした1年生のほとんどが単位認定に回り，2年生で「英語演習」を履修登録しなかった。そして，2年次の受験は「英語演習」を履修登録している学生のみを必須としていたので，1年次のスコア上位者の多くが受験をせず，学年の平均点が1年次より下がるという現象が起こっていたのである。

しかし，上位年次でも英語を継続して学んでもらいたいという考えからカリキュラムを改訂し，2年生以上を対象としていた発展科目を2007年度入学生からは3年生以上の設定とし，2年生の「英語演習」を週2回の必履修科目（TOEIC スコアによる単位認定科目から除外）とした。これにより，学生全員が2年次にも TOEIC を受験することとなったため，1年次から2年次にかけての英語力の伸びが TOEIC スコアという数値ではっきりと示されることとなった。さらに，上でみたように，2年生の週2回の「英語演習」のうちの1回は「TOEIC 重視クラス」として，1年を通して TOEIC 中心の授業をおこなっている。このような新カリキュラムに移行後初の2年生がこの12月に TOEIC を受験するのである。以前のカリキュラムでは「高得点者が単位認定に回って受験しなかったから平均点が下がった」と言うことができたが，新カリキュラムではそのような言い訳ともとれ

る理由付けは通用しない。これから数年間の TOEIC の結果によって，経済学部の英語教育改革の成果が問われることはまちがいない。

さて，経済学部では，2006年度より学部所属の英語教員が独自に作成した英語のプレイスメント・テストを入学時に実施している。このテストは旧テストとほぼ同じ問題形式で作成されており，その平均点は2007年度入学生（現2年生）が120点満点中61.8点，2006年度入学生（現3年生）が61.2点となっている。ところが，上の表でみたように，1年次の TOEIC の平均点は，2007年度生が354.8点，2006年度生が368.4点と逆転現象が起こっている。2007年度生は新テスト，2006年度生は旧テストでの受験なので単純に比較はできないが，2007年度 IP テストの平均スコア447点が2003～2006年度の平均スコア446.25点（DATA & ANALYSIS 2007, 3）と変わりがないことを考えれば，プレイスメント・テストが正しく機能していない可能性が考えられる。例えば設問の難易度を全体的に下げるといったプレイスメント・テストの改訂が必要になるであろうし，4月のプレイスメント・テストと12月の TOEIC の結果を比較するという観点からは，新テストと同じ問題形式にするといった改訂が必要になるであろう。

上で述べたように，これから数年間の結果で経済学部の英語教育改革の成果が問われることになる。教員はよい結果を導くことができるように真摯な気持ちで日々努力を続けなければならない。

参　考　文　献

〔1〕 Saegusa, Yukio. “A Practical Criterion for Measuring English Proficiency.” *Waseda Journal of Human Sciences* (Faculty of Human Sciences, Waseda University) 3.1 (1990) : 133-45.

〔2〕 井上　治.「TOEIC® テスト初級者のためのリスニング・セクション　パート2攻略法――ETS 作成問題の分析を通して」『生駒経済論叢』（近畿大学経済学会）第4巻第3号（2007年3月）：47-59.

〔3〕 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会編.『TOEIC® 公式ガイド＆問題集 日本語版』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2000.

〔4〕 ――.『TOEIC® 公式ガイド＆問題集 Vol. 2 日本語版』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2002.

〔5〕 ――.『TOEIC® テスト新公式問題集』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2005.

〔6〕 ――.『TOEIC® テスト新公式問題集 Vol. 2』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2007.

〔7〕 ――.『TOEIC® テスト新公式問題集 Vol. 3』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2008.

〔8〕「TOEIC® テスト DATA & ANALYSIS 2004」東京：国際ビジネスコミュニケー

ション協会 TOEIC 運営委員会，2005.
〔9〕「TOEIC® テスト DATA & ANALYSIS 2007」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会，2008.
〔10〕「TOEIC® STYLE BOOK」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会，2006.